

タイ

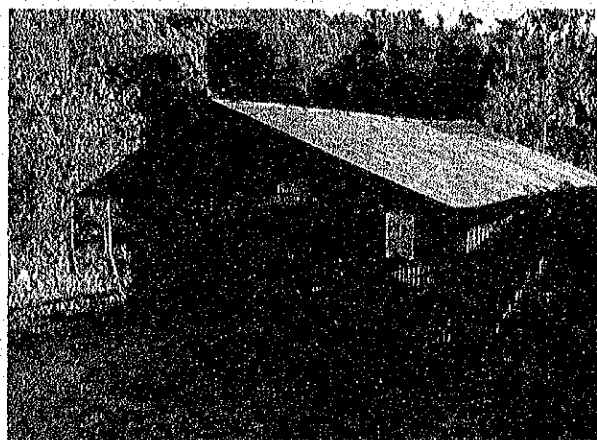
独自の文化を持った タイ山岳地帯の少数民族の村落でも 隊員たちは輝いていた

タイ北部の山岳地帯で隊員が生活を共にする少数民族は、独自の文化を持った社会を形成している。

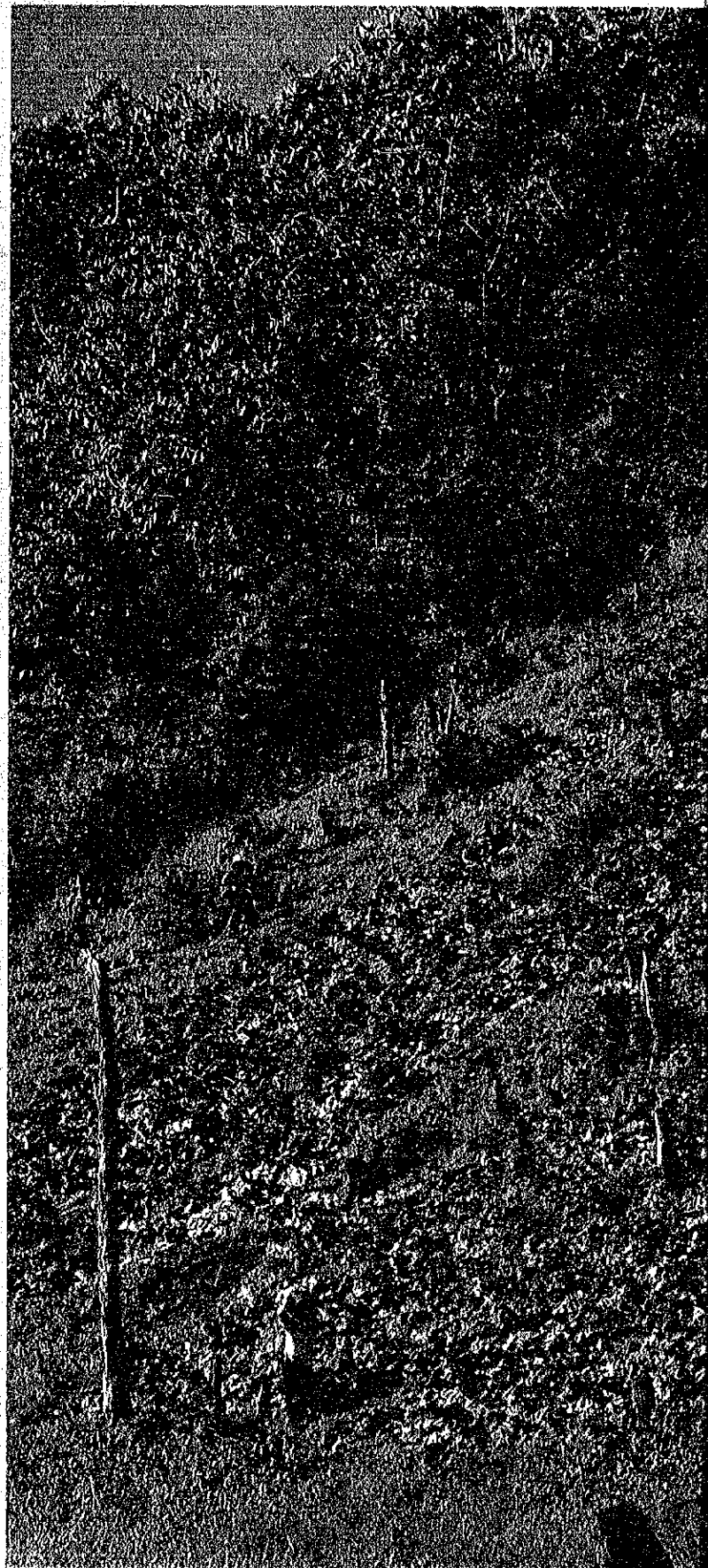
少数民族はほぼ9つに分かれ、昔ながらの生活を営んでいる。この辺りの地域に点在する村落は513を数える。ここに住む約11万人の山岳の民たちの生活向上を目的とし、運営されているのが山岳民族福祉センターである。

隊員たちはセンターに配属され、いくつかの村に分かれ、ある隊員は野菜栽培に、またある隊員は家畜飼育にと、隊員たちは互いの情報を交換し協力し合いながら、時には合流して活動している。心と心の交流で村人たちに隊員たちは暖かく迎えられようになり、素朴な村人との新たな協力がまた始まる。

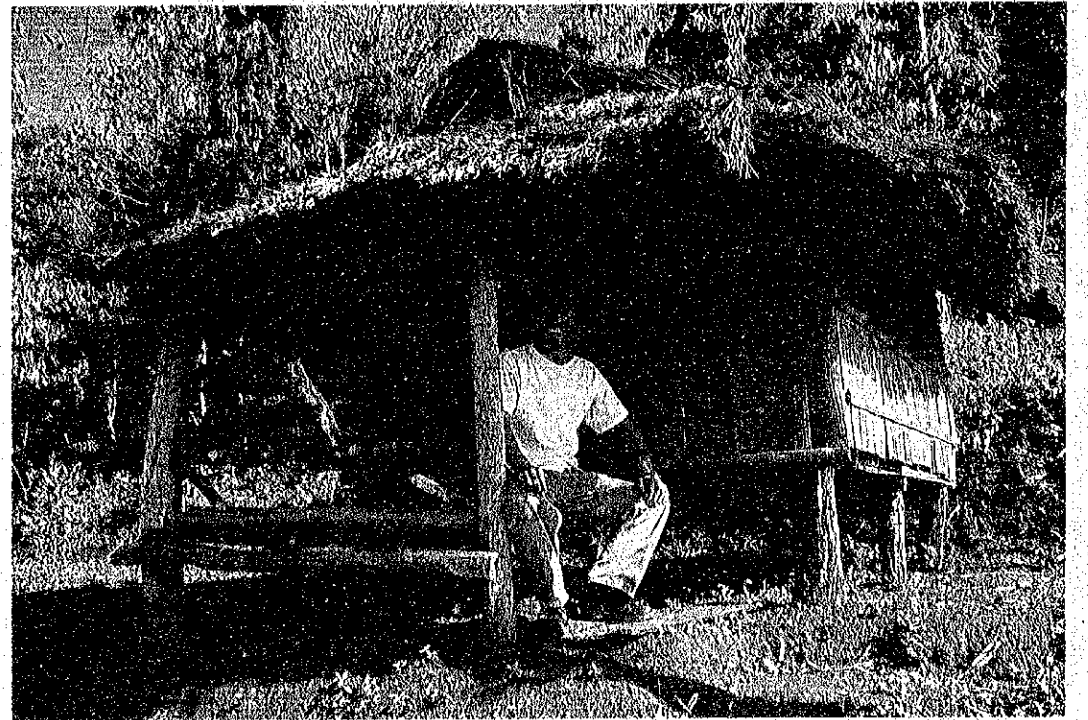
貧困や病気と、まだ多くの課題は残されているが、しっかりと地に足をつけ、平和に暮らす村人たちの姿は、まるで心のふるさとを見るようである。



(上) キネやウスを使った女性の重労働を軽減する目的で建てられた精米所。(右) タイ北部のキャベツ畑で働く村人たち。熱帯だが高地であるため作れる高原野菜のキャベツはバンコクなどに運ばれ換金される。村人たちにとって大きな収入源である

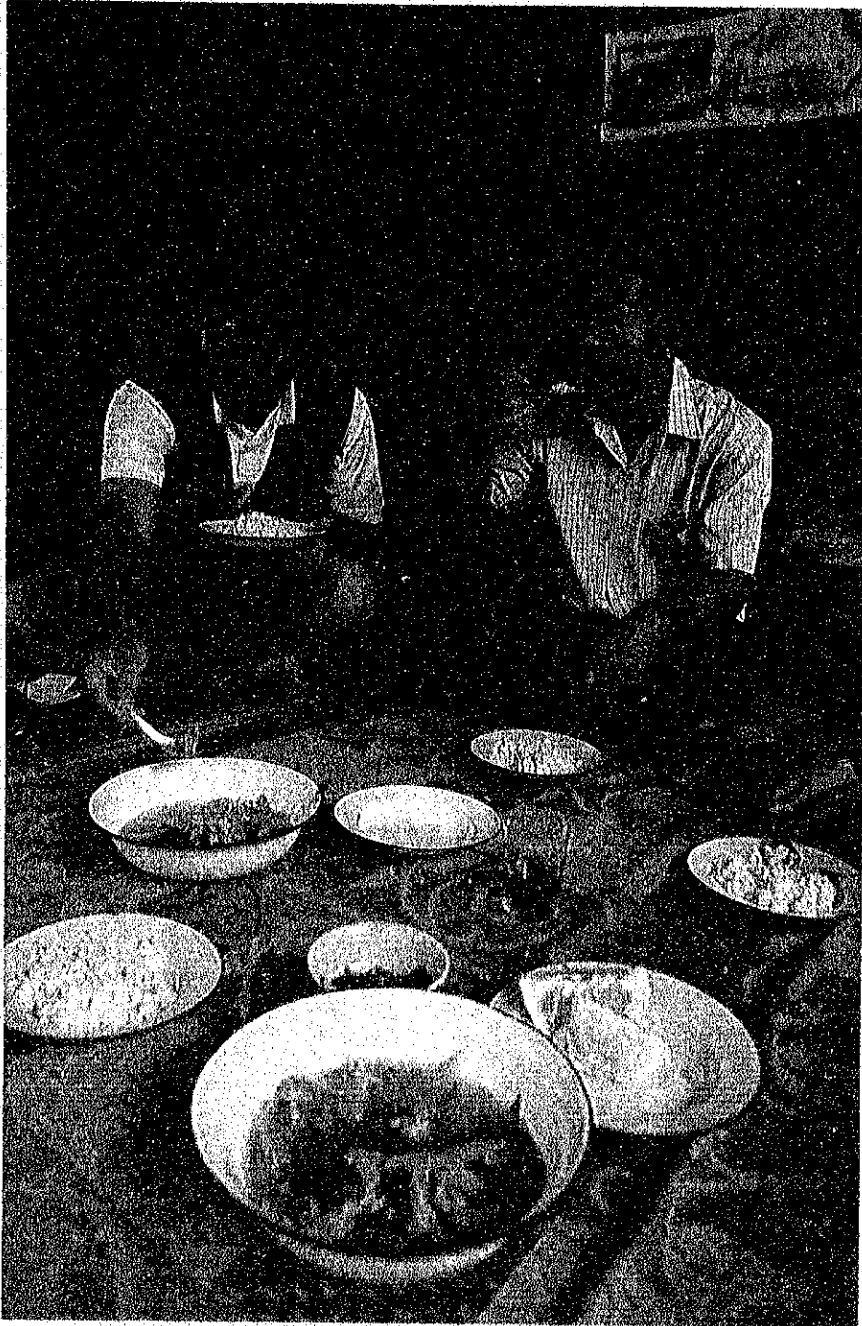


野菜栽培の三池一矢隊員。彼の活動は村落開発全体に向けられている。(左) 水田米として日本米数種がテスト用に植えられている。稲作を通して村人とすっかり親しくなった。(下) 時々寝泊りに使うため、村人の協力を得て建てた小屋でくつろぐ



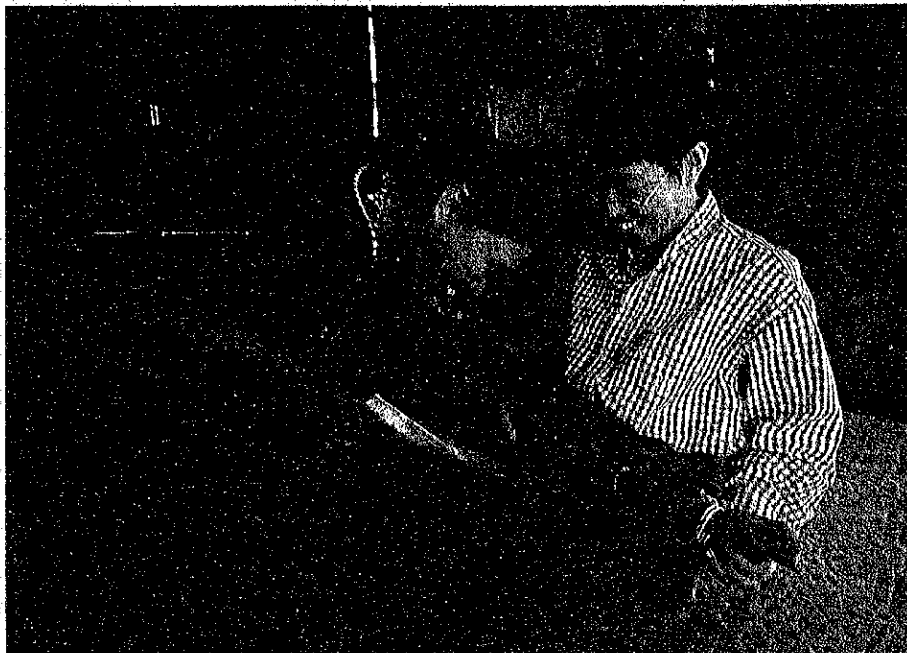
タイ王室のプロジェクトで熱帯果樹栽培の生産が開始された。佐藤文雄隊員は、押し木で苗を作っていた。苗は育つまでに数年の歳月を必要とする





村人の副業として養鶏を導入、現金収入の道を確保する試みである。(上) 鶏には伝染病予防のワクチンを接種。家畜飼育の上原亮隊員が村々を巡回する。(左) 今日にはラフ族の村で昼食をごちそうになった。(右) ラフ族の少女たちと民族衣装を着て友好を深める

村落開発普及員の小西美也子隊員は織物、手芸品の商品化調査のため村を訪れた。今日は、村の婦人に教えてもらいながら織物に挑戦。(左下)商品化検討中の試作品。伝統的な模様が多い。隊員により市場や流通経路についても調査中である



カレン族の村で、朝食をとる三池、小西、小艇隊員。活動の前、朝ごはんはしっかりと

ブータン

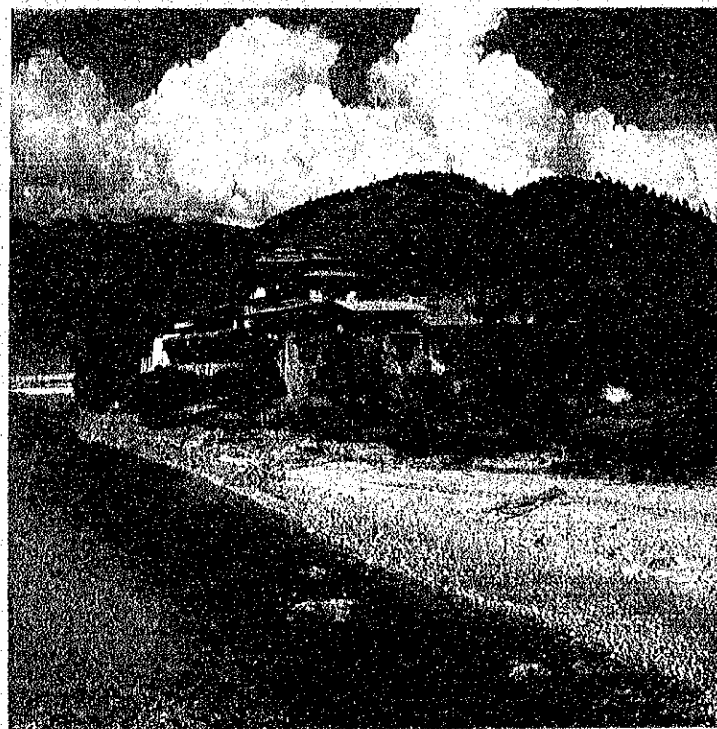
歴史的遺産の復元 子供たちへの教育 ヒマラヤのふもとにも 隊員の協力活動がある

ブータンには遠い昔、夏と冬の季節によって、ふたつの首都が存在した。現在も多くの人が避寒に訪れる古都プナカを流れるふたつの大きな川、ポチュー（父川）とモチュー（母川）の合流点では、歴史的遺産プナカ城の修復工事が進められている。

建築施工の隊員が、ブータン独特の建築物の復元に協力することで、日本の技術とブータンの伝統建築が一体となり、往年の姿を見せてくれることだろう。

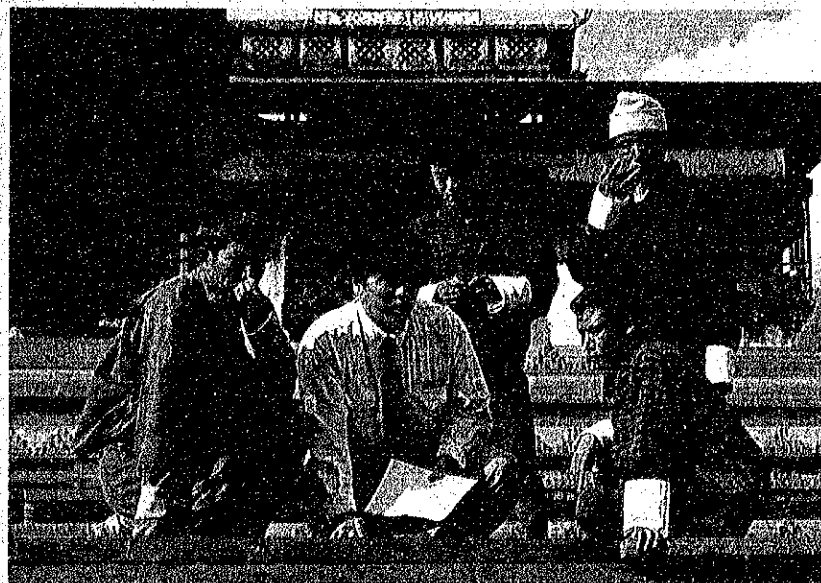
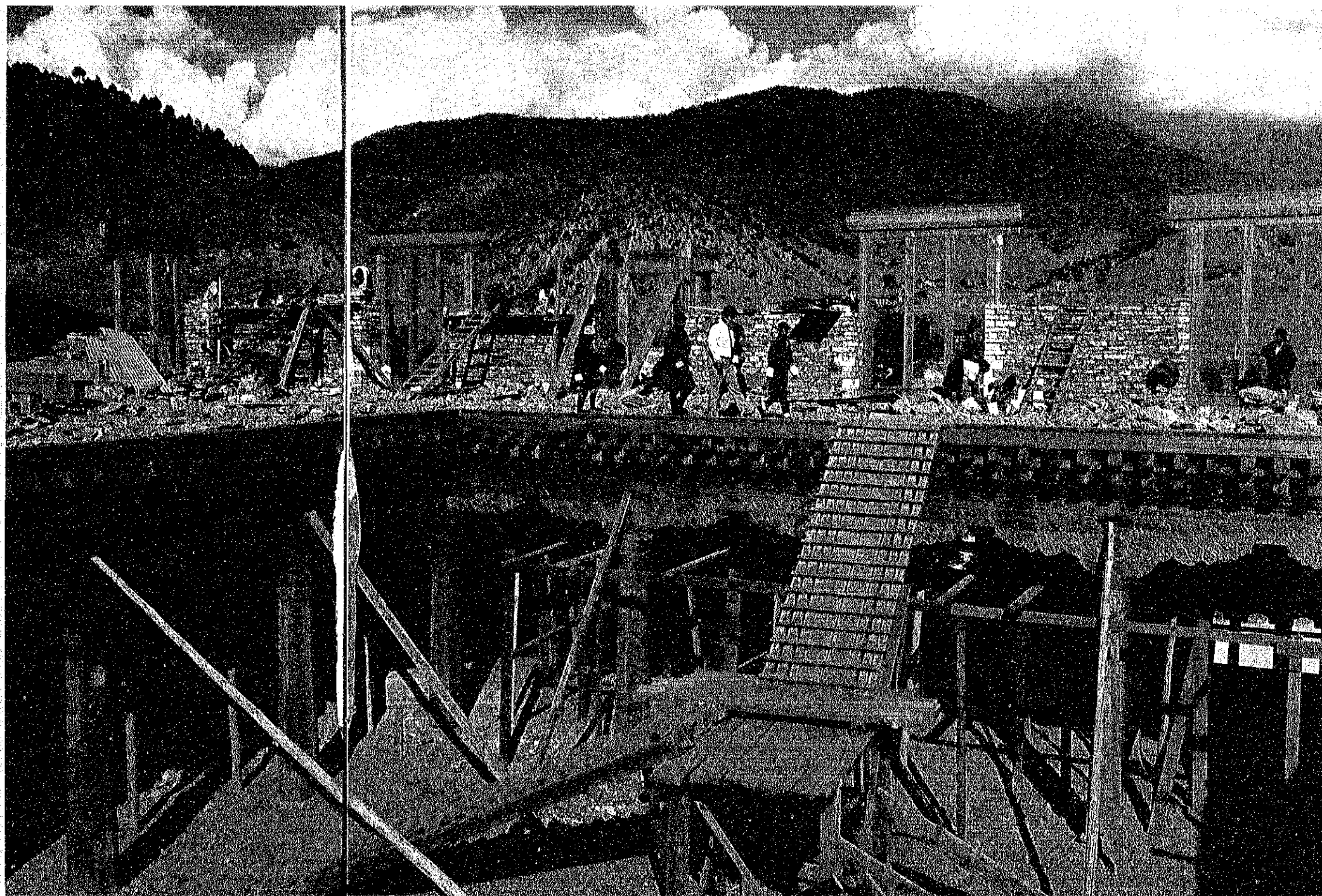
首都ティンブーのチャンガンカ小学校では、理数科教師の隊員が子供たちに九九を教える声が響いている。日本式の教育で算数が教えられている。

11月11日、この日はブータン国王の誕生日。国をあげての祝日、ブータン初のマスケゲームイベントは盛りあがりを見せた。この演出も体育隊員の教育活動のひとつである。



マンパワーでほとんどの作業は進められています

総勢400人が働くゾン（城）の改築現場。最近、洪水に漬った河川の工事現場で、カウンターパートとの打合せ。修復計画の半分近くの工事を終えたいにも、大仏殿の現場などを忙しくかけ回る建築施工の平山修一隊員。（上）ポチュー（父川）とモチュー（母川）の合流点に建つプナカゾン（城）



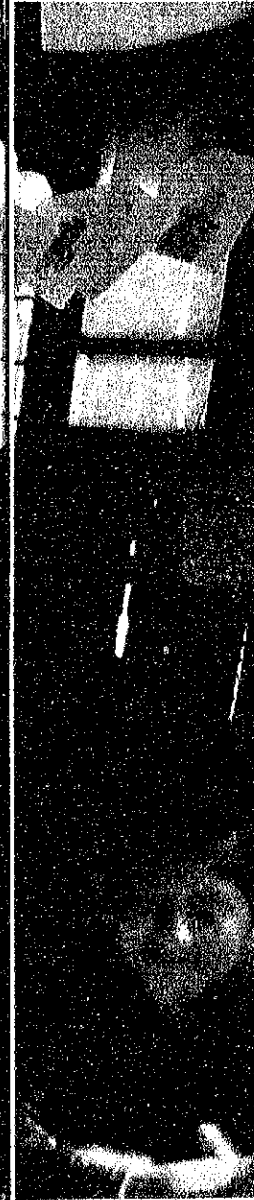
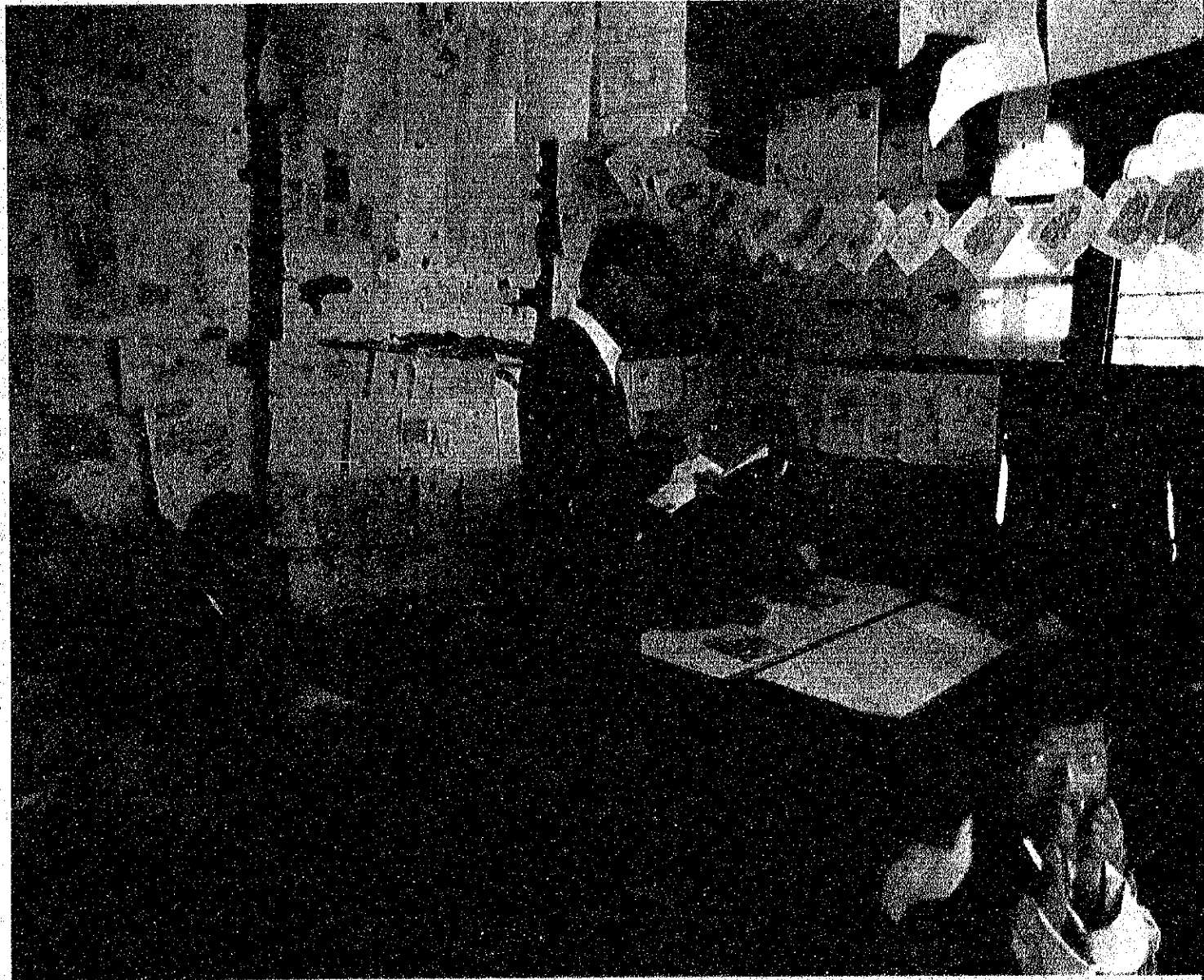
よく似合うと評判の、民族衣装“ゴ”を纏った平山隊員

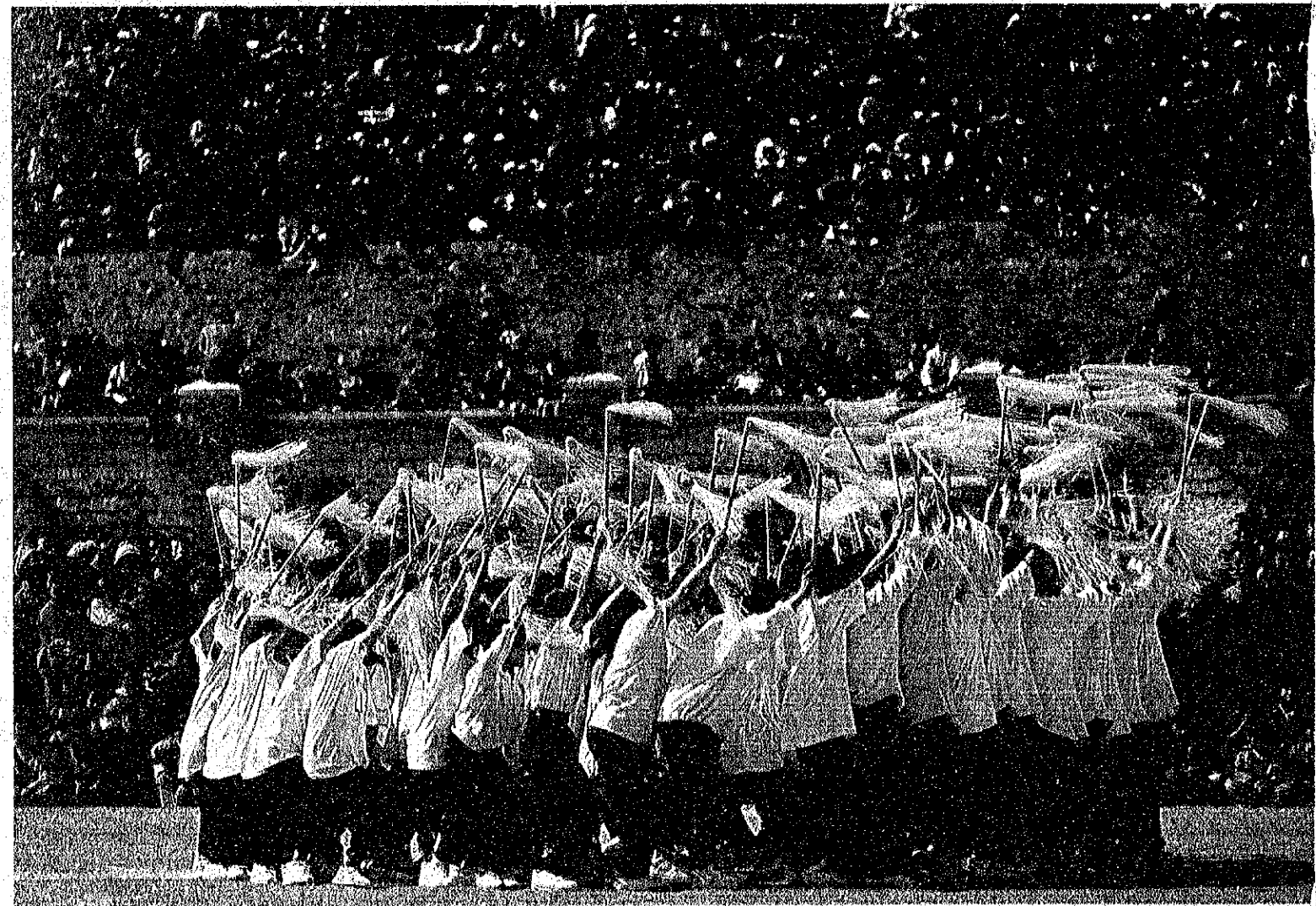
2×2=4 (ニニンガシ) はここでは
TWO TWO FOURです

人なつこいブータンの子供たちに、週26時間の
算数を教える理数科教師の小林光明隊員。計算力
をつけさせるため、日本式の九九を完全に暗記さ
せようと指導。(右) 下宿先の大きな仏壇をパッ
クに大家さんと。大家さんの孫も教え子のひとり。
(次頁中央) 教え子に囲まれて。(次頁下) "子供
の日" に生徒たちに食事を配る



肉、チーズ、野菜にトウガラ
シなどブータン料理に欠かせ
ない食材が豊富に並ぶサブジ
マーケット。毎週土曜、日曜
には隊員たちも買い物にやっ
て来る。(左) 野菜を持って
微笑む理数科教師の岩本智美
隊員。(右) "ゴ" に身を包み
自宅でくぐるシステムエン
ジニアの櫻井純一隊員

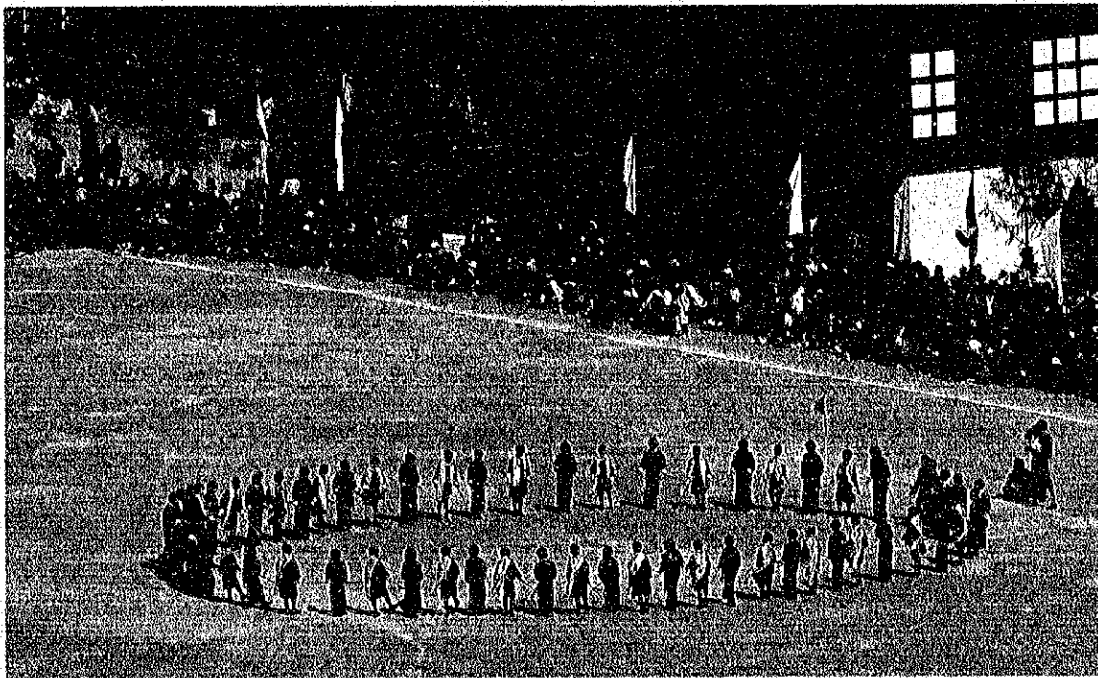




練習から本番まで2カ月ならず、
マアマアの出来だったと思います

体育指導の木下直子隊員が演出したブータン初の
マスゲームは、人口3万人の首都ティンブーの全
市民が集まったかと思えるほどの大観衆の拍手に
包まれ大成功であった。(上) 演技中のマスゲー
ム。(右) 前日の練習風景





ブータンでは式典の最後に必ず踊る。「また会いましょう」という意味のタシレバという伝統的なダンス

(上) 民族衣装「ゴ」を着たブータンのフォークダンス。
(下) 地方でも祝賀会がおこなわれた。民族衣装「キラ」を着て、弓の試合を応援する女性たちの踊り

カメラマンノート ①

吉田勝美

放浪への憧れはつねに
習慣の鎖に心いらだつ
冬の嵐より再び
野生の血は自醒めゆく
ジャック・ロンドン『野生の呼び声』

私の職業は一応、カメラマンということになっている。仕事から、いつも冷静に行動しよう、そう心がけている。今まで600人以上のJOCV隊員に会い続け、数多くの隊員の生活を垣間見た。心を開いてくれた人も、そうでない人も、日本での社会同様、さまざまだった。しかし、一点違うところは、日常性から切り離された特別な場所に、自ら志願して第一杯の2年間を過ごしていることだった。

今回も、タイ北部、ブータン、カンボディアを訪ね、以前同様少々冷静さを失い、人間が本来持っている野生の心が刺激されてしまった。とんでもないところに足を踏み入れたと後悔するばかりだ。それは、システム化された日本社会から離れ、シンプルな生き方を実践している隊員たちに出会ったからだ。

JOCVができて30年、人は変わっても、「野生の血」は受け継がれ、確実に隊員一人ひとりの中に流れている。「隊員も変わったでしょ?」という声もある。しかし、本質的なJOCV興さは少しも変わっていない。こうしたとんでもない体臭を持ち続けている人が私は好きだ。きっとこれからも、こうした隊員に会い続けるだろう。

